

静岡県知事賞

歩はばを合わせて

長泉町立長泉小学校 五年

宮口 かほ



お母さんが病気になった。ずっとずっとお腹が痛くて。ずっとずっとその痛みにたえていた。お父さんは仕事を休み、お母さんと病院へ行った。その病院で検査をして、お母さんはとても恐ろしい病気だとわかった。お母さんは平気そうにしていたけど、一度だけ泣いた。友達やおじさんに病気の事を話した時だ。私は、泣いているお母さんのそばに行き頭をなでた。

「ありがとう。」

とお母さんは笑って言った。

この頃の私は、すっかりお母さん子ではなくて、一緒に歩くのも、手をつなぐのも、ギョツと抱きしめられるのも拒否していた。家族三人で出かける時も、私は一人でスタスタ歩いて行ってしまふ。次にお父さんがスタスタ歩き、お母さんは後ろでモタモタ歩いていて。

「ちよっと！二人！歩くの速すぎ！」

ってお母さんがさげんでいても、私とお父さんはスタスタ行ってしまう。そんな日々が続いていた。でも仕方ないと思った。

だって私はもう五年生で、親ばなれをしようとしていたのだから。

お母さんが入院して、手術する事になった。その間は、お父さんと二人暮らしだ。お父さんは、お母さんに色々教わっていた。お母さんは、

「とにかく、かほの生活をいつも通りにしてやりたいから。」
と言っていた。お母さんは、いつも自分の事より私を優先している。自分が恐ろしい病気になっても、

「何があっても明るくほがらかに！」
と言って、ふだんと変わらずに生活していた。お母さんのいい九日間、お父さんは大変そうだったけど、私はいつも通りに変わらず過ごせた。運動会があったけど、お父さんがお弁当を作ってくれたし、お父さんが応えんに来てくれて、お母さんに観せるビデオを撮ってくれた。私はすごく幸せな子供だなんて感じた。それは、お父さんとお母さんに愛されていると感じたからだ。

私が帰ったら、お母さんが退院して帰って来ていた。九日ぶりに会えて泣いてしまった。お母さんは、少しやせていたけど、元気そうだった。

「ただいま！」

「おかえり！」

私はお母さんに抱きついて、お母さんはギュッと抱きしめてくれた。

今、私は三人で出かける時、お母さんの横でゆっくり歩く。お母さんの歩はばに合わせて。私達は家族だ。これからもずっと、何があっても。

親切って、実は、自分の一番近くにいる大切な人に「してあげる」のではなく「する」ものだと思った。そして、そこから周りへ広がって行くものだと思った。それに気づいた私は、人としてまた一歩成長できたと思う。

